

第2回あまがさき創生に向けた意見交換会発言内容要旨

日時：平成27年7月29日（水）16時00分～17時30分

場所：市長室

座長：意見交換会ということですので、それぞれの立場から自由に発言をお願いします。

委員：尼崎の学力について。公立高校の学区再編により他の市から市内の公立高校に高校生300名が入ってきています。反対に、100名が他の市に出て行っています。その尼崎から出た100名の実態を聞いてみますと、「より学力レベルの低いところに入った」生徒が多いとのこと。このバランスの悪さをどう考えればよいでしょうか。学力が全てではないですが、その実態についてもっとオープンにして議論していかないといけないのではないのでしょうか。

委員：地域全体として決意をして、勉強をするという雰囲気を作っていないと、レベルは上がらないと思います。年輩の人も教育に対しては関心を持っています。中高一貫校・大学の誘致や、中学校給食の実施、女性や子供の医療費負担の充実や無料化などに取り組んで頂きたいと考えます。また、女性が働きやすい職場（研究施設等）の誘致をしてほしいと思います。

委員：尼崎市は市の成り立ちから、1つの地区に体育館をつくると、同じものを6地区に建ててきましたが、その結果、行政区ごとの特色が少なくなっているように思います。皆、横並びに同じ施設を作る必要はないと考えます。

委員：これから、学校の跡地等が出た際に民間事業者売却することもあるかと思いますが、若い層が住めるような住宅と高齢者向けのマンションを隣接させて、交流を深めるようにするなどの取り組みをしてはどうでしょうか。皆で考えていくことが大事です。

委員：大学が地域に還元をしていかなければならないと思っています。なかなか難しいのですが、外に出て、尼崎での経験をしてもらう必要があると考えています。地域の方に協力して頂いて、学生を育てていただければと思います。

座長：大学というインフラは町と関わる際に非常に重要な要素であり、使える道具です。

市長：尼崎市は全国で唯一、2つの大学とCOC協定を結ばせてもらっています。これは珍しいことです。

委員： 市内のとある専門学校は地域に入りたいが誰に相談したらいいかわからないと
のことでした。反対に我々は地域に学生に入ってきてほしいと伝えています。仕
組みを作らないとうまく実現できないのかもしれませんが。地域で避難訓練をしよ
うにも、若い人がいないと成り立たないところがあります。

委員： 園田学園女子大学でよければ、地域と連携するための専門部署である地域連携
推進機構を活用ください。

委員： 国が定める全国一律の枠を超えることは難しいと思いますが乗り越えて欲しい
と思います。人口動態を見ても尼崎の特殊性が浮き彫りになっています。そもそ
も現在の尼崎市の人口は多すぎたのであり、30 万人でも良いのではないでしょ
うか。人口推計は 10 年程度しかもちません。30、50 年後を予測するよりも、実質
的な課題に集中して取り組まなければならないと思います。

座 長： 尼崎に必要なことは何ですか。

委員： 人口に焦点を当てると 30 代のファミリー世帯の流出を絞り込むということ
です。そこに尽きます。

座 長： 尼崎市は北部、中部、南部で動きが異なります。特性の違う町がモザイクのよ
うになっていて、差異が大きくなっています。尼崎を平均的に捉えて政策を打っ
ていくのは不可能に近いのではないのでしょうか。

委員： 解決すべき方向性がしっかりと絞り込まれた上で、戦略を作るのであれば意味
はあると思います。ポイントを絞っていくことが重要です。

委員： 南部エリアが衰退しているのではないのでしょうか。地域、時期によって
取るべき施策は異なると思います。南部で何をするかを考えなければなりません。

座 長： ビジネスと結びついた新しい住まい方が南部では可能ではないかと感じていま
す。

委員： 多くのことが盛り込まれていますが、ポイントを絞る必要はあると思います。
女性の就労に注目が集まっていますが、尼崎市では今、高齢者が増えています。
今は外来患者数がピークですが、今後は入院患者数が増え続け、介護が重要にな
っています。介護インフラを整備しておかないと、女性の働く場を創っても、介
護のために外で働けないということも起こりうるのではないのでしょうか。

顧 問： 未来予想図と総合戦略・ビジョンは別物と考え、この機会に若い人たちと本気

で話すべきだと思います。2060 年を担う人たちの視点で見なければならぬと思います。子どもたちが尼崎のまちの何を感じてもらうかが勝負だと思います。大人は子どものためであれば、変わることができます。

座 長： 今いる人たちを逃さない取組と同時に、社会全体の流動性が高まるなかで、「尼崎が面白い」と思う人を引きつける仕組みをつくるのが大事だと思います。

顧 問： 「あの経験があったから今の自分がある」というレベルの経験があれば、例えば外に出ていった子どもたちも戻ってくるのではないのでしょうか。

座 長： 外の人が尼崎に関わる理由は、大学・仕事・結婚だと思います。最近有名な海士町・神山町などがありますが、若い人がますます面白い人を連れてくるのです。

顧 問： 尼崎の「人」は面白いですが、外に開いているかどうかがネックになっているように感じます。尼崎のコミュニティは内向きの傾向が強いのではないのでしょうか。

副市長： 人口規模で 25 万人もいれば、ヨーロッパでは大都市です。駄目なわけではありません。しかし、45 万が 25 万人に減少＝衰退というイメージを持たれるところが悩ましい。

副市長： これから起こることであろうことにしっかり対応できる都市であることが大事です。みんなで考えながら、地域で課題を解決する力をつけ、行政はこれを支援する。尼崎は人口減少対策について頑張っており、それができれば地区ごとのマネジメントをしていくような形にしていきたいと思います。

座 長： 住んでいる人たちが市内で移動することをサポートしてもよいですし、新しいビジネスをやる人を支援することもできます。お金も人も循環するような尼崎になれば、周辺から人が集まってくるのではないのでしょうか。今までの延長ではなく、新しい社会を築いていくようなことになるかもしれません。

委 員： 30 万人になって誰がどう困るかを突き詰めて考える必要があるのではないのでしょうか。行政が一番困ると思います。地域の産業として成り立たせるためには商業も厳しいかもしれません。しかしそれ以外で、困る人はいないのではないのでしょうか。

座 長： 商店街のお客が少なくなるのは大変だと思いますが、店舗を持っていることと、使うことを別にして、空き店舗を貸すような仕組みを提案していけば、新しい動きが出てくる可能性はあるのではないのでしょうか。

委員： 子育てが最大の課題だと思います。クリエイティブな人材を育てる教育が重要なのではないのでしょうか。すべての子どもの成績を良くすることは難しいです。だから、メリハリをつけて教育を行う政策はどうでしょうか。市長が教育に力を入れているというメッセージを市民に伝えればよいと思います。

委員： JR 尼崎に降り立った若いお母さんが西宮でなくて尼崎に留まってくれるようにしなければなりません。一芸に秀でている子どもを教育・活躍できるような新教育拠点や特殊校を作るのはどうでしょうか。

委員： 京阪沿線ではシニア層によるNPO活動が盛んです。その理由はパナソニックのOBが地域活動を始めているからです。尼崎にも例えば大手企業のOBがたくさんいると思いますが、そのような人材が講師になって教育するのはどうでしょうか。これは同時にシニア活躍にも繋がります。高齢者を弱いものとして捉えるのではなく、現役で活躍してもらえれば、要介護度も下がります。また、統合された学校は学びの場としてリニューアルすれば、成功の確率が高いのではないのでしょうか。

市長： 皆さんが関心をお持ちの「教育」の「中身」についてどこまで核心に迫ることができるかが大事だと思います。

委員： 地域がどう教育に密着していくか。市民と一緒に考えて考える必要があります。行政が作る全体計画ではなくて、行政区それぞれが考えて作ればよいのではないのでしょうか。

委員： トップダウンではなく、ボトムアップ。つまり、コミュニティで学力を上げる方法を考える必要があります。

市長： 本当に上げるべきは学力なのでしょう。学力であれば、以前より改善しているのではないのでしょうか。尼崎市の教員の指導レベルが他市に比べて著しく低い、なんてことはないと思っています。

委員： レベルの低い生徒に合わせて授業を進めるため、教科書で教えていない箇所があるなど、勉強の進みの遅い学校は実際にあると思います。

委員： 空間計画も私の専門の1つなのですが、未来予想図に書いてあることは、根本的には同じ戦略のように見えます。アートのまちにしていこうというのは諸外国では王道で、どこでもやっているところではないのでしょうか。

委員： 私は尼崎が「最後の秘境」的であることが強みだと思います。また、水辺はそもそも市民にとって価値のある空間だと思いますが、産業化で市民は水辺から離れてしまいました。モダンアートは町に出ていく（アウトリーチ）ことで、市民のものになっています。尼崎歴史音楽祭の動きもそうです。「尼崎は面白い」と思ってもらえれば人は留まります。

委員： JR 尼崎駅周辺は再整備が進み、新しい街並みが生まれています。一番の顧客である若いお母さんが西宮に出ていくかどうかを迷った時に、尼崎のオリジナリティのある教育で惹きつけられれば良いと思います。また、子どもにも計画策定に入ってもらい、夢やアイデアを語ってもらえれば良いのではないのでしょうか。

委員： 企業として、少年サッカー大会、子ども将棋大会、吹奏楽フェスティバルを行っています。尼崎の子どもたちがなかなか勝ち残ってきません。教育は学力だけではなくて、そのような部分も関係するのではないのでしょうか。

委員： 子どもも大人も論議をしなければならないと思います。行政や市民も手を取って子どもに向き合う必要があるのではないのでしょうか。

委員： 自治会にも女性が出てくる割合が多くなっています。それ自体が悪いわけではありませんが、最近国は国の施策においても女性の役割を強く押し出し過ぎではないのでしょうか。次世代育成のためには、男性・女性両方が頑張っていないといけないと思います。

委員： クラブ活動を授業と同様に行うのは先生にとって大きな負担になります。別途地域の方々を顧問として雇うなどしてはいかがでしょうか。

市長： クラブ活動をやりたい先生もいれば、授業をやりたい先生もいます。教育のモデル校を幾つか作ることにはできるかもしれませんが。音楽でもスポーツでもアートでも、意欲を掻き立てるような経験が必要です。総合的に取り組む必要があります。

委員： クラブ活動が重荷になる先生の方が多いと思います。1年、2年間サバティカルでそこから解放されるようになれば、先生はリフレッシュできると思います。

委員： 学校教育のみにフォーカスせず、だれが、どういう形で教育をするか、うまく設計する必要があります。

市長： 尼崎は、阪神間でも指折りの利便性の高い場所にあるというのが強みだと思います。神戸も京都も加えた阪神間の面白い人たちが集まりやすく、うまく外

からの刺激を受けられるようにしていくべきです。そうすれば、尼崎の人が外に刺激を与えられるようになります。徹底的に開いて、交流して刺激を受けて、という形がよいのではないのでしょうか。

座 長： 尼崎の人が内向きだという発言がありましたが、歴史・伝統のあるところはどうしてもそうになってしまう傾向にあります。

市 長： 尼崎は外から来た人が多い町ですし、私でも市長になれているくらいですから、必ずしもそうとは言えないのではないのでしょうか。

委 員： 大産業都市だったという過去の遺産は、尼崎の強みであり、有効活用すべきだと思います。負の遺産ではありません。建物がアートになり、退職者は大切なノウハウを持っています。

座 長： 一見マイナスに見えるものを資源とできるような仕組みづくりが大事だということですね。時間が来ましたので、以上で、本日の意見交換会を終わりにします。